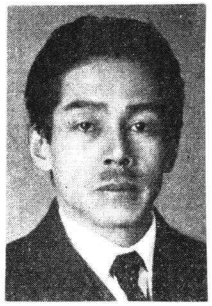
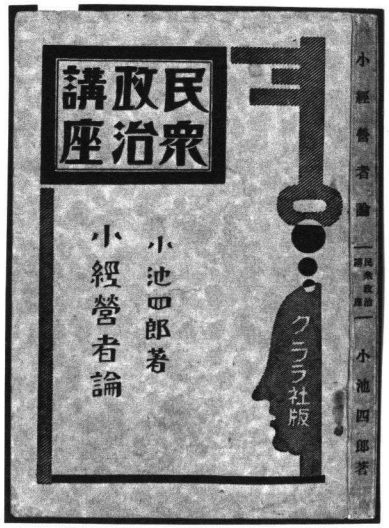
小池四郎（こいけ）　評論家。明治二十五年二月二十一日東京生れ（一八九二―）。第一高等學校を經て、大正六年東京帝國大學工科大學採鑛科卒。鈴木商店に入社し社會運動を志し、十一年に退社して上京。日本工人倶樂部理事となると反動派に逐はれる。一方産兒制限運動に奔走、また安部磯雄を知り、社會民衆黨の出版機關クララ社を經營。次（つい）で代議士となり日本國家社會黨結成に參劃、政綱後の愛國政治同盟總務委員長就任。昭和九年臺灣獨話會代表、翌年フィリピン獨立運動の亡命志士ラモスの支援に當る。更に二・二六事件後の二月會結成の中心となる。

譯著書、マリー・ストープス作『戲曲生ルルモノノ禍』（譯、大正十三年九月十五日クララ社）、『産兒調節の理論と實際』（大正十四年二月二十七日クララ社）、『智識階級の行くべき道』（昭和二年二月九日社會民衆黨本部「社會民衆黨パンフレット」）、ヤプトン・シンクレヤ著『人は何故貧乏するか』（譯、昭和二年三月十五日春秋社）、『小經營者論』（昭和四年五月十二日クララ社「民衆政治講座」）、トロツキー著『レニンの横顔』（譯、昭和八年四月五日春陽堂）、『日本無産階級は滿蒙問題をどう見る』（島中雄三・片山哲合著、昭和八年十一月十二日先進社）等。